

# シャネルNo.5 と帝政ロシアの香水産業

大 野 斉 子

## 序

### 1. 帝政ロシアの香水産業

帝政時代のロシアには香水産業が栄えていた。モスクワには大規模な工場を有する香水会社がいくつも存在し、市場には千種類に及ぶ香水や化粧品が出回っていた。だが、こうした香水の時代がかつて存在していたことを知っている人は、現代のロシアにおいてもほとんどいない。香水は生活文化の小道具としてとらえられる傾向にあり、学問として取り上げられることが少なかったことがその要因の一つであるが、最大の理由は香水の歴史が革命を境に人為的に封殺されたことにある。革命の混乱の中で香水会社は接収され、技術者たちは国外に亡命し、香水産業は断絶した。貴族やブルジョワジーの贅沢な文化を否定する気運の中で香水をめぐる知は歴史の闇に葬られたのである。

しかし、帝政時代のロシア香水の栄光を今に伝えるものが存在する。フランスのシャネル香水会社が製造・販売している香水、シャネルNo.5である。シャネルNo.5は1920年に作られ、1921年から発売された。生み出されてからすでに90年余りを経た今も、世界でトップクラスの売り上げを誇るシャネルNo.5は現代香水<sup>1</sup>を代表する名香の一つである。



図 1 シャネルNo.5

### 2. 現代香水の基礎としてのシャネルNo.5

シャネルNo.5が現代香水において大きな存在となっているのは、人気のためばかりではない。この香水の重要性は、現代香水のカテゴリーの一つを築いたことにある。

現在、香水はいくつかのグループに分類される。分類の仕方によって数え方は異なるものの、たとえば日本フレグランス協会が提唱する分類法では香水はシトラス、フローラル、シプレー、オリエンタル、フゼアの5種類に大別される。

さらにこのグループの下に20数種類のサブカテゴリーがある。これまで市場で発売されてきた何千という香水がこのわずかなサブカテゴリーに分類されるのである。この中でシャネルNo.5はフローラル系のサブカテゴリーであるフローラル・アルデヒドに分類される。これは基調となる花の香りに合成香料のアルデヒドが加わって抽象化された香調をもつグループである。

現代香水の名調香師として知られ、香水に関する著書を多く残したエドモン・ルドニツカによれば、こうした香水のカテゴリーには基本となる香水が存在する。その香水に倣っていくつもの香水が作られ、一つの系列を形作っていくのである。基本となる香水は数が少ない。20世紀に入ってから現代香水の基礎となった香水は15ばかりしかないと言われる<sup>2</sup>。

シャネルNo.5はこうした基礎となる香水の一つである。シャネルNo.5の香りは香水の世界に衝撃を与えた。アルデヒドの投与によって冷たく彫琢されたシャネルNo.5の香りは、それまで存在しなかった新しい香りだった。シャネルNo.5の後に、花の香りを基調としてアルデヒドを加えた香水が数多く生み出された。シャネルNo.5はフローラル・アルデヒドの系列を生み出したのである。

シャネルNo.5は、フランスの服飾デザイナー、

ガブリエル・シャネルの名を冠したシャネル香水会社が製造するフランス香水の代表作である。なぜそのシャネルNo.5がロシアと関係しているのだろうか。

本稿ではシャネルNo.5のルーツをたどりながら、帝政時代のロシアにおける香水産業を再発見し、帝政ロシアの香水文化という視点から現代香水の世界をとらえ直していきたい。

## Ⅰ．シャネルNo.5のルーツ

### 1. シャネルNo.5の作者

シャネルNo.5は誰の作ったものなのだろうか。その名の通り、ガブリエル・シャネルの生み出したものだと考えるべきなのだろうか。香水をめぐる文献の多くは、シャネルの世界観を前提にしてシャネルNo.5の提示する魅力について論じている。

だが実際にはその作り手はエルネスト・ボーというロシアの調香師であった。エルネスト・ボーはフランス人の父とロシア人の母をもつフランスの家系の出身であり、モスクワに生まれ育ち、モスクワの香水会社で調香師として活躍していた人物である。ボーは亡命ロシア人であるドミートリイ・パーヴロヴィチ・ロマノフ大公の紹介によりシャネルと知己を得た。

ではガブリエル・シャネルはこの香水の誕生にどのようなかわったのだろうか。

シャネルはボーに香水の製造を依頼する際に自身が思い描くイメージをエルネスト・ボーに伝えたとされる。たとえば調香師ですら嫉妬したくなるような香りを作ってほしいと伝えたという説や、夏の庭の香りがする香水が欲しいと言ったという説がある<sup>3</sup>。

だがこうした情報はその場にいなかった人物が又聞きで述べたものが多く、シャネル自身も過去の出来事を語る度に異なる脚色を施したことで知られる。シャネルNo.5があまりにも大きな成功を収めたために、シャネルNo.5の誕生物語は数多くの伝説に彩られているが、信憑性の高い説から眉唾ものの情報まで諸説紛々として真相は突き止められていない。

だが客観性の高い以下のような情報も残されている。すなわちエルネスト・ボーが作った10種

類の試作品の中から、シャネルが5の番号を振られた香水を選び出し、それを発売することに決めたということである。

この情報の典拠はエルネスト・ボー本人の講演録である<sup>4</sup>。エルネスト・ボーは1942年2月にフランスの化学会館で講演を行い、その際にシャネルNo.5を制作した時のことを語った。その講演録は1946年に『香水産業 (Industrie de la Parfumerie)』誌に掲載された。活字で残されたエルネスト・ボー本人による回想はこれが唯一のものである。

「マドモワゼル・シャネルは大変人気の高いクチュールの店を持っており、その店のために私にいくつかの香水を依頼しました。

私は彼女のところに自分の作品を見せに行きました。それは1から5、20から24の二つのシリーズでした。彼女はそこからいくつかを選び、その中でNo.5と書いてあるものを選びました。そして「その香水にどんな名前を付けるべきでしょう？」という質問をすると私にこう答えました。「私は、私の服のコレクションを1年の5番目の月である5月5日に発表しています。だからこの香水についている5の数字を残すことにしましょう。5の数字はこの香水に幸運を運ぶことでしょう。<sup>5</sup>」

エルネスト・ボーは多くを語ってはいないが、この回想からはシャネルが香水を依頼する際に何らかのイメージを語った可能性はあっても、製造過程にはかかわっていないこと、彼女が決定的な役割を果たしたのは最後の選択の場面であったことがわかる。

一方、エルネスト・ボーはシャネルNo.5を制作した時のイメージをはっきりと語っている。

「私がシャネルNo.5を創ったのはどんな時期だったと思いますか？まさに1920年のことです。私が戦争から帰還するときでした。私は北極圏にあるヨーロッパ北部の地域の田舎に配属されました。白夜のころ、そこでは湖や川がたいへんみずみずしい香りを放つのです。私はこの香調を記憶にとどめ、作り上げました。<sup>6</sup>」

ボーがシャネルNo.5のインスピレーションを得たのはシャネルに会うよりも前の、戦争から帰還するときだった。それを彼はイメージ通りに作り上げたというのである。香水を作品としてとらえ

るならば、シャネルNo.5はエルネスト・ボー個人の創造物であると考えるべきである。

## 2. ラレNo.1

そのことを裏付けるのが近年になって解明されたある事実である。それはシャネルNo.5には前身となる香水が存在するということだ。このことは香料会社ジヴォーダン SA の化学者フィリップ・クラフトとクリスティン・ルダール、および香水会社ライトイヤーズ社のフィリップ・グテルの三人が行った研究で突き止められ、2007年に論文で発表された<sup>7</sup>。

その前身となる香水は、エルネスト・ボーがまだロシアで調香師として活躍していた1913年に制作したラレNo.1である。ラレNo.1はもとはエカテリーナ二世を記念し、ブーケ・ド・カトリーヌという名称で発売された香水であり、後にラレNo.1と改名して再販された<sup>8</sup>。



図2 ラレNo.1<sup>9</sup>

ラレNo.1がシャネルNo.5の前身であるという説は1998年にエドワーズが取材を通じて『パフュームレジェンド』の中で初めて明らかにした情報である<sup>10</sup>。この情報をもとに、クラフトらのチームは香水の処方の化学的な分析を通じてシャネルNo.5に特徴的なアルデヒドの使い方がすでにラレNo.1に見られることを証明した。

アルデヒドは脂肪族アルデヒド、テルペン系アルデヒド、芳香族アルデヒドなどに属する多くの種類の分子の総称である<sup>11</sup>。このうちシャネルNo.5に用いられたのは脂肪族アルデヒドに属するものである。シャネルNo.5には Aldehyde C-10、C-11 (Aldehyde C-110 および Aldehyde C-111 Len)<sup>12</sup>、C-12 (L)、C-12MNA<sup>13</sup>、などが使われている。

とはいえ、アルデヒドを使用した香水はシャネルNo.5が最初ではない。シャネルNo.5が画期的だったのは、アルデヒドの濃度を1%まで高めたことにある。これは通常の10倍近くに相当する濃度だ。たった1%であっても、千分の1%<sup>14</sup>の単位で香料を配合する調香の世界では過剰ともいえる濃度の上げ方だった。

さらにシャネルNo.5の新しさはもう一つあった。それは従来の香水に使われることのなかったアルデヒドC-11を用いたことだ。アルデヒドC-11は、それ自体は非常に油っぽい匂いでありながら、フローラル系の香料と一緒に使ったときに驚くような効果を生んだ。花の香りをいっそう柔らかく、抽象的に変えたのである。

こうしたアルデヒドの使い方はシャネルNo.5が最初とされていた。しかし2007年に発表された論文で、ラレNo.1の組成がシャネルNo.5とよく似た特徴を持つことが明らかになったのである。

## 3. ルーツとしてのロシア

これは単にシャネルNo.5の来歴を解明するにとどまらず、現代香水におけるロシア香水の重要性の再考につながる発見だった。

この説に依拠して考えるなら、シャネルの依頼を受けてエルネスト・ボーが行ったのは、自分の過去の香水の改良であったことになる。ボーは香水の新たな処方を開発する実験の途上にあったのだろう。シャネルNo.5の開発は、ロシア時代から続けてきた仕事をフランスでも継続し、発展させる試みだった。エルネスト・ボーの調香師としての仕事は、ロシア香水を現代香水のルーツの一つに昇華させたのである。

またこのことは、エルネスト・ボーの個人的な能力だけでなく、帝政ロシアの香水製造の水準が高度であったことを示している。とりわけ当時、アルデヒドのような合成香料は香水製造に実用化しにくい不安定な物質だった。

だがエルネスト・ボーの所属するラレ社のラボラトリーにはありとあらゆる香料が備えられ、ボーの調香の師であるレメルシエは、古いやり方にとらわれず、常に新しいものの創造を目指すことをボーに教えた<sup>15</sup>。ロシアは原材料の調達や調香技術、芸術性の追求など様々な点において当時



の最先端に位置していたのである。

シャネルNo.5は、ロシアの香水の精華であり、ポーは帝政時代に香水産業が存在したことの証人であった。ではシャネルNo.5とエルネスト・ポーが我々に開いて見せる帝政ロシアの香水産業は、いかなるものだったのか。以下では、ロシアの香水史と文化について見ていくことにしたい。

## Ⅱ. ロシアの香水産業と香水文化

### 1. ポー家とラレ社

エルネスト・ポーは1881年にモスクワのフランス人の家庭に生まれた。父親はエドアルド・ポーといい、フランスのリール出身の商人である。母親はロシア人であった。エルネストはロシア語名をエルネスト・エドアルドヴィチ・ポー、フランス語名をエルネスト・アンリといった。

エルネスト・ポーはモスクワで生まれ育った。1898年に彼はモスクワの香水会社、A. ラレ社（А. Ралле и К<sup>о</sup>）に入り石鹼製造を学ぶ。そののち1902年から当時ラレ社の香水部門の技術主任であったレメルシエのもとで調香の技術を学んだ。

エルネスト・ポーには兄がいた。エドアルド・エドアルドヴィチ・ポー、フランス名をエドアルド・フランソワ・ジョゼフという。当時のポー家の出世頭であった兄エドアルドは1898年にラレ社の代表に就任した。<sup>16</sup>

エルネストは兄の会社の技術者として、第一次世界大戦に従軍する1914年までともにラレを支えた。

A. ラレ社はロシアの香水会社の中で随一の規模を誇る大会社であった。エルネスト・ポーは講演の中でかつてのラレの栄光をこう述べている。

「この会社は非常に大きく、1500人の労働者と一つの工場、そしてこの時代としては非常に発達した組織と産業設備を擁していました。その上、ラレ社はその広大さ故の（ロシアの1億8千万人の住民と中国、ペルシア、バルカンなど）そして香水と贅沢に対するロシア人女性の生来の趣味故の広大な市場に対応しなくてはなりませんでした。<sup>17</sup>」

モスクワ郊外に作られたラレ社の工場では、最新の技術を取り入れ、香水、石鹼、化粧品など多品目を大規模に生産した。



図3 ラレ社の工場<sup>18</sup>

### 2. ラレ社以外の香水会社

しかし20世紀初頭のロシアではラレに匹敵する大規模な香水会社がほかにも存在した。その一つがブロカル社（Брокал и К<sup>о</sup>）である。ブロカル社もまたモスクワ郊外に大規模な工場を稼働させ、香水や石鹼、化粧品の生産・販売を行っていた。20世紀初頭のモスクワでは、「香水はブロカルとラレの店で選ぶ<sup>19</sup>」のがお決まりのショッピングルートとなっていた。

このほか、薬局を本業とするフェレイン社（В. К. Феррейн）も多くの香水を製造販売していたことで知られる。香水は現在ではファッションの一部と考えられているが、19世紀までは薬品と同じカテゴリーに分類されていたため、薬剤師や薬局が香水を扱う例はよく見られた。

革命前夜のロシアにはこのほかにも多数の香水会社が操業していたことをエルネスト・ポーが証言している。ポーによれば、ロシアには2グロスの香水会社があったという<sup>20</sup>。1グロスは144なので、288ほどの香水会社が存在していた計算になる。もちろん大小取り混ぜての数字だと思われるが、ロシアで香水産業が盛んであったことは間違いない。

しかしロシアは香水に関しては後発の国である。香料作物の多くはエジプトやインド、地中海沿岸など熱帯から温帯にかけての地域で作られる。またロシアではイタリアやフランスのように、16-17世紀から香水製造がおこなわれていたわけでもない。香水生産に関しては不利な条件の方が多いロシアにおいてなぜ香水産業が発展したのだろうか。19世紀から帝政末期までのロシアの香水産業の歴史を概観しながら発展の軌跡を追うことにしたい。

### 3. ロシアの香水史 1840年代から1860年代

ロシアで最初の香水会社はA. ラレ社である。A. ラレ社は香水の製造・販売会社として1843年、フランス人の香水業者アルフォンス・ラレによって設立された<sup>21</sup>。

実際にはラレ社よりも前にロシアで香水を扱う業者は存在していたことがわかっている。しかし、本格的に香水の製造を行い、後に大会社に発展した初めての会社がラレ社であったために、ラレはロシア最古の香水会社とされている。

ラレが創業した1840年代にはまだロシアの香水市場は成熟していなかった。香水産業に大きな変化が訪れるには1860年代を待たなくてはならない。

1862年にR. キョレル社 (Р. Кёлер и К<sup>о</sup>) がモスクワに設立された。創業者はロマン・ケーラー (Roman Koehler) といい、ドイツ系とみられる<sup>22</sup>。キョレル社は化学薬品の製造販売会社であり、20世紀初頭には150万ルーブルという当時としては巨額の資本を有する大会社となった。キョレルはモスクワを拠点として化学薬品工場、エチルエーテルと石鹼の製造工場、薬品や香水の容器を作るガラス工場、写真の乾板工場のほか、モスクワに小売り店舗を5件構えていた。

こうした工場においてキョレル社は膨大な品数の香水製品と化粧品を製造した。キョレル社は当時、旅行用、家庭用、馬車用など様々な種類の救急箱を製造していたことでも知られ、最後の皇帝ニコライ二世の日記には、皇后アレクサンドラの所有していたキョレル社製造の救急箱について言及するくだりがある<sup>23</sup>。

キョレル社と同じ時期の1864年に創業したのが、前章で紹介したプロカル社である。プロカルの創業者アンリ・プロカルはフランス出身の香水技師であった。プロカルもまたキョレルやラレに勝るとも劣らない大会社に成長し、ロシアの香水産業を中心に支えることとなった。

キョレルとプロカルがこの時期に創業した最大の要因は1861年の農奴解放と、それに続く産業革命の到来であった。キョレルやプロカルら外国人の香水業者が、農奴解放によって生み出された労働力と眠れる市場に好機を見定めてロシアで香水製造を始めたことがこの時期における特徴で

あった。

1860年代にはまだ香水の市場は貧弱であったが、香水と同じ化学産業に属する石鹼製造が急速に成長する。香水技師は石鹼製造の技術を持っているのが通常であり、プロカル社もキョレル社もはじめは香水製造ではなく、石鹼製造から出発した。この石鹼業の成長がのちのロシア香水産業の基盤を築くことになった。

### 4. ロシアの香水史 1870年代から20世紀初頭

1870年代には石鹼業の成長が目覚ましかった。プロカル社が一つ1コペイカのコールド石鹼を発売して石鹼は貧しい人々にも手の届く商品となり、巨大な販路を獲得した<sup>24</sup>。

1875年にプロカル社は石鹼製造から香水製造業に乗り出した。だが香水は相変わらずモスクワの住民といえども文化的になじみのない高級品であった。

1870年代に創業したことが記録されているのはヤロスラヴリの石鹼製造会社、コマロフ社である。コマロフ社は1872年に設立され、石鹼の品質の良いことで知られた。ロシア国内の博覧会で5つの賞を獲得し、1909年にはマルセイユで開催された万国博覧会で金メダルを受賞した。コマロフのように郊外で石鹼製造を営んでいた会社は数多く存在したといわれるが、そうした会社の商品や広告が現存している例は少なく、実態はまだつかめていない<sup>25</sup>。

1880年代に入るとロシア人の薬剤師オストロウモフ (А. М. Остроумов) が設立したオストロウモフ社やゴレンデル社が創業し、石鹼、化粧品、香水を手掛けるようになった。オストロウモフ社はふけ取り石鹼などの機能性の高い化粧品を主力商品とした。

ロシアの香水市場が成熟を見せるのは1890年代以後のことである。エルマンズ社 (К. Эрманс и К<sup>о</sup>) など、新しい香水会社が操業する一方、薬局を本業とするフェレイン社が1897年に香水の発売を開始するなど、それまで香水を手掛けていなかった他業種の会社が香水産業に参入する例がみられる。同様に、菓子製造業のシウ社 (А. Сиу и К<sup>о</sup>) も香水業に参入した<sup>26</sup>。

20世紀初頭には各社はロシア国内の博覧会の

みならず、ヨーロッパの都市で開催される万国博覧会に出品し、いくつもの賞を受賞した。ラレヤブロカルは国外に小売りや卸売りの店を出すなど、輸出にも力を入れるようになった。

## 5. 香水市場の変化

だが、ロシアの香水生産量や輸出量などを統計から分析すると、20 世紀初頭におけるロシアの香水産業の主な市場は国内であったことがわかる。これについては他の論文で詳述したので、本稿では簡単に言及するにとどめるが、ロシアの香水産業が 1890 年代以降、急成長を遂げた背景には国内市場の成熟、すなわちブルジョワジーを中心とする都市部の中間層の成長があった。

19 世紀末から 20 世紀初頭ごろにおけるロシアの香水の価格は、フランスから輸入された高級香水に比べると安かった。もちろん、ロシアは身分制社会であり、貧富の差も大きかった。だがこのころになると香水は特権階級でなくては手の届かない品物ではなくなっていたのである。

香水業者の間でも、都市の中間層を市場として開発しようとする動きは見られた。ブロカル社の社史には以下のようなエピソードが記録されている。1878 年のこと、ブロカル社はモスクワに 2 つ目の店舗を開店するに当たり記念の商品を用意した。それはブロカル社の数種類の香水、石鹸、オーデコロン、匂い袋、髪用のポマード、白粉と紅のミニチュア 10 品目を紙製の小箱に入れたものである。ひと箱 1 ルーブルと手ごろな値段がつけられたこの小箱は開店とともに飛ぶように売れ、初日に 2000 箱を売り切った。それ以来、この詰め合わせの小箱はどんな広告よりもブロカル社の人気を高め、数年間にわたって生産が続いたという<sup>27</sup>。

都市部における中間層の生活文化が外国製の商品やそれをもたらす新しい習慣によって彩られるようになるのは、1870 年代から 1880 年代以降のことである。ブロカルの小箱にはそれまでロシアの人々になじみの薄かった香水や芳香石鹸、化粧品が存在と魅力を知ってもらおうという意図が込められていた。そして 20 世紀までの間に、都市の住民たちは香りの楽しみ方を身に着けていったのである。

## 6. ロシアの香りの文化 香水のイメージの分類

ロシアのように香水を使う伝統がなかった地域が、突如として香水の一大市場となったのはなぜなのだろうか。身体に直接香りをつける習慣のなかった東アジアでは 21 世紀に入っても、化粧品市場における香水のシェアは他の地域に比べて非常に低いというように、香りの感性は地域差が大きく、感覚の中でも変化をうけにくい領域ではないだろうか。

だが 20 世紀初頭のロシアは香水の大きな市場に成長し、特権階級だけでなく市民たちも香水を愛好していた。「若い女性の労働者たちにとっても[ロシア製の] オーデコロンは手の届く品物だったが、可能な時にはフランス香水を買った。」<sup>28</sup> という証言も残されている。ロシアには香水を受け入れやすい文化的な土壌があったのではないだろうか。

このことについて、ロシアの香水市場が急速に拡大した 20 世紀初頭の香水をもとに考察してみたい。残念ながら香水の香りそのものの分析を行うことはできないが、香水瓶の意匠や価格表のイラストなどの視覚的な表象を手掛かりに分析を行いたい。これらは単なるパッケージの装飾ではなく、当時の人々に共有されていた想像力を刻印していると考えられるためである。

ロシアの香水が表現していたイメージは以下のグループに大別される。まずナポレオンやエカテリーナ二世など、歴史上の人物をテーマにしたグループ。これには 1912 年にボロジノの戦い 100 周年を記念してラレ社が発売した「ナポレオンの花束」や、1913 年のロマノフ王朝 300 周年を記念してブロカル社が発売した「女帝の愛した花束」という香水が入る。



図 4 「ナポレオンの花束」<sup>29</sup>

日本やインドなど、オリエンタリズムを前面に



押し出したグループもある。たとえば20世紀初頭のヨーロッパで流行したジャポニズムの影響を受けてラレ社が発売したサダヤッコという香水が挙げられる。

そのほか、19世紀末から絵画や文学、装飾芸術の領域でブームとなった18世紀回顧の影響を受けたグループがある。さらに花をテーマにした香水も一大グループを形成しているが、これは意匠だけでなく香水の香りそのものの説明の意味も担っている所が他とは異なる。

また、あらゆるテーマを包み込むアール・ヌーボー風の意匠は香水瓶や広告などに広く見られた。

以上のような香水は同時代のフランスにも多く見られ、ロシアの独自性は特に見られない。むしろ、ヨーロッパ全域を席卷したジャポニズムやアール・ヌーボー、18世紀回顧などの流行との関連の強さは、香水文化のコスモポリタニズムを示していると見るべきであろう。

## 7. 近代の外の香り

こうした中で注目すべきもう一つのグループがある。それはロシアの民話や古い時代を題材にした香水である。



図5 ブロカル社の香水「ボヤーリンの花のオーデコロン」<sup>30</sup>

ロシアは18世紀以来、社会制度や芸術の諸領域において、近代化を進めてきた。だが古きロシア、あるいは民衆の文化は閉じたシステムとしての近代の外に広がる豊饒な世界を呼び起こすものであった。

香水が使われるようになる前のロシアにおける

香り、とりわけ身体の香りをめぐる象徴体系はこうした近代の外の世界に根差していた。ロシアの経典外聖書や宗教文学、民衆の中で語られてきたラスカースでは概して、体から発する悪臭は概して宗教上の罪と結びつく。たとえば『サヴァオフとサヴァウル、光の霊と闇の霊の反目』という経典外聖書には天界から追放された墮天使が悪臭を発したというエピソードがある<sup>31</sup>。

また、宗教詩『40人の遍歴者たち』の中で公爵夫人のアプラクシヤは二つの罪を犯す。それゆえ神から罰が下され、全身腫瘍で覆われ、悪臭漂う病気に苦しむことになる。しかしキリストの教えに則ったやり方で彼女が許されたとき、その病気はたちどころに治る<sup>32</sup>。

こうした信仰は19世紀後半に入っても失われていなかったのではないだろうか。文学作品を精神史の記録として見ると、19世紀文学にこれと深く関係するエピソードを見出すことができる。

それはドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』に描かれたゾシマ長老の死の場面である。この場面では身体の匂いと信仰をめぐる問題が直接的な形で取り上げられている。人々の絶大な信頼を得ていたゾシマ長老が亡くなると、その遺体は早くから悪臭を放ち始めた。

『カラマーゾフの兄弟』の舞台は19世紀のロシアだ。啓蒙活動の高まりの中で科学の知識が社会に浸透しつつあったこの時代にあって、悪臭を自然の摂理として受け止める科学的な見方は、古い信仰の中に飲み込まれてしまう。ゾシマ長老の死体から発する悪臭は、彼が実は罪深い人間だったのではないかという疑念を人々の間に呼び起こし、人々の混乱はパニックに発展する<sup>33</sup>。

ルネサンスを経たヨーロッパでは失われてしまった古い身体観がロシアに動態保存されていたことは、ロシアの香りの感性を特徴づける要因になっていたのではないだろうか。身体から立ち上る芳香は、単にいまここにおける悦楽を供するのではなく、近代に引き裂かれた精神と肉体を古き信仰につなぎとめる役割を負ったのである。

香水はつけると目に見えず、嗅覚でのみ感知しうるものになる。香水(духи)は肉体の物質的な境界を超える靈魂(дух)のメタファーであった。

ここに見出される越境のモチーフは、実は先ほ

ど挙げた、19世紀末から20世紀後半における香水の一連のグループが共有している特徴でもある。すなわち、今ここから時空を超えた世界を幻視し、想像の世界に身を置くこと。破滅へ突き進んだ帝政末期のロシアにおいて香水が大流行したのは、こうした越境と幻視への渴望があったためかもしれない。

## 8. 香水産業の断絶

シャネルNo.5の前身となるラレNo.1、より正確にはその元の香水ブーケ・ド・カトリーヌが制作された1913年はエルネスト・ボーがロシアで調香師として活躍した最後の年となった。ロシアの輸出入統計によると、1913年にロシアが輸出した香水は499トンにのぼった<sup>34</sup>。

しかしロシア香水産業の栄光の時代はロシア革命によって強制的に終わりを迎えることとなった。

ロシアにあった香水会社の多くは、当局によって接収された。中でもラレ社の工場は早い段階で接収され、1917年に国有化された。この工場はラレ社時代には香水や化粧品、石けんなど多岐にわたる品目を製造していたが、接収後は香水の製造が止められ、主な製造品目は石けんに変わってしまった。国有化後、ラレ社の工場は名称を「国立石けん製造工場No.4」(Государственный мыловаренный завод No.4)に変えられた。

ラレと並び大きな工場であったプロカル社の香水工場も同じく国有化され、「国立石けん製造工場No.5」(Государственный мыловаренный завод No.5)と名称を変えた<sup>35</sup>。

香水の輸出量は1918年以降、極端に低下した。これは単なる需要の低下といったことで説明できるのではなく、工場の接収に伴う香水の製造停止が大きく影響していることは明白である。

ロシアの香水文化は貴族やブルジョワジーの贅沢と目され、その後長らく歴史の闇へ葬り去られたのである。

## Ⅲ. 革命後のエルネスト・ボー

### 1. フランスでの再出発

ロシアの香水産業は断絶した。ソビエト時代に再び香水の製造が始まるが、その規模は小さく、

帝政時代に及ぶべくもなかった。ロシア香水の高度な文化と技術は亡命者たちによってその後の時代へと受け継がれた。

エルネスト・ボーは第一次世界大戦がはじまった1914年にフランス軍に従軍し、1918年から1919年にかけて主にアルハンゲリスク周辺において連合軍最高総司令官司令部防諜部隊の秘密諜報員として、また捕虜収容所の所長として働いた<sup>36</sup>。

1919年の夏ごろにエルネスト・ボーはアルハンゲリスクから巡洋艦に載ってフランスへ帰還した。その後エルネスト・ボーがロシアへ帰ることはなかった。

香料会社のシリス社は南仏のカヌヌにほど近いラ・ボッカという町に、エルネスト・ボーをはじめ、ラレ社の社員を引き揚げさせた。そして「ラボラトワール・ラレ」という香水製造会社を設立した<sup>37</sup>。エルネスト・ボーは帝政ロシア時代を回顧した後で、仲間とともにラ・ボッカにラレを再建した時のことをこう述べている。

「その工場では、貨物列車によって発送を行っていました。化粧せっけんや白粉、オーデコロンを積んだ車両があらゆる方角へ向かって出発しました。

ロシア革命の後、私たちがラ・ボッカにラレ社を再建するときには、工場内に鉄道の連結機とターンテーブルを設置することから始めましたが、多分、この幸福な記憶がそうさせたのでしょう。<sup>38</sup>」

この言葉には失われたロシア時代の栄光を引き継ごうという思いがくみ取れる。

エルネスト・ボーがラ・ボッカの研究所で最初に制作した香水はシャネルNo.5、より正確に言うなら、シャネルに提示した一連の試作品であった。

これらの中には、シャネルNo.5のほかにも香水史に名を残す名香が含まれていた。エルネスト・ボーはシャネル社のためにシャネルNo.22やGardenia (ガルデニア) Bois des Iles (ボワ・デ・ジル) Cuir de Russie (キュイール・ド・リュシ) を世に送り出した。

その後ブルジョワの調香師としても活躍し、Soir de Paris (ソワール・ド・パリ)、Kobako (コバコ) などの香水を生み出した<sup>39</sup>。すべての香水



がヒットを納め、香水の愛好者だけでなく、調香師たちの称賛的となったことはエルネスト・ボーの調香師としての優れた能力を示している。

## 2. 二つの顔

エルネスト・ボーは講演の中で自らのロシア性についてあまり多くを語らず、一貫して自分をフランス香水界の一員として位置付ける立場を崩さなかった。

それはなぜだったのだろうか。エルネスト・ボーはロシアを忘れ、ロシアを捨てたのだろうか。

エルネスト・ボーと同じシャネル香水会社で、ボーの同僚として働いていたロシア人調香師のヴィリギンは、職を得たときのエピソードを回想録に残している。ヴィリギンが香水の技術者として職を求めている時に、シャネル香水会社にヴィリギンを推薦したのはエルネスト・ボーであったという<sup>40</sup>。

当時、ボーはすでにシャネルNo.5の成功によって社会的な栄達を実現していたが、フランスの亡命ロシア人のコミュニティとのつながりを保ち、ロシアからの亡命者への援助を惜しまなかった。

エルネスト・ボーは公に語った言葉はわずかしが残されていないが、ヴィリギンに対してはロシア文化への愛や自らの香水の制作について多くを語ったようである。香水Bois des Ilesをめぐるヴィリギンの回想には以下のようなくだりがある。

「あるとき、エルネスト・エドアルドヴィチは何から着想を得てこの香水を作ったのかと尋ねた。彼は『スピードの女王だよ。』と答えた。[中略] エルネスト・エドアルドヴィチは何回もこのチャイコフスキーのオペラをモスクワの帝室ボリショイ劇場の素晴らしい舞台で楽しんだ。[中略] このオペラはボーの心に深い感銘を与えた。<sup>41</sup>」

フランスでの後半生において、ボーはフランスの香水界における栄達をほしいままにし、フランス文化をこよなく愛した。彼はフランスワインのコレクターであり、Chevalier du Tastevin というブルゴーニュのワイン通人協会の会員でもあった<sup>42</sup>。

だが生涯、ボーは調香師としても一人の人間としても、ロシアに生まれ育った者としてのアイデンティティを捨てなかった。自宅にはボーが長年

にわたり収集したロシア美術のコレクションが並べられ、まるで美術館のようであったという。おそらく、ロシア人コミュニティの中では、自分の文化的なルーツがロシアにあることをはばかりことなく語れたのではないだろうか。

フランス時代のエルネスト・ボーにまつわる資料からは、フランス人として生きる表向きの顔と、ロシア人としての秘めた顔を使い分ける、亡命者としての生き方の難しさを思わずにはいられない。

## 結び

現代香水はフランスを中心地として発展したが、そのルーツは一枚岩ではなかった。ロシア出身のエルネスト・ボーがフローラル・アルデヒドの系列を生み出したほか、イタリア出身のコティがシプレ・フルーティの系列を生み出すなど周縁国の出身者の功績は大きかった。

現代香水は現在では化粧品産業における一大部門として世界を市場に発展している。その源流には、数百年、数千年にわたり受け継がれてきた様々な地域の香りの歴史がある。それを現代香水に引き継いだのは、ボーをはじめとする数人の調香師、あるいは数個の香水であった。

ロシア革命は帝政ロシアの様々な文化領域の断絶をもたらしたと同時に、亡命ロシア人たちによるロシアの文化的な遺伝子の拡散を促した。シャネルNo.5は今もロシアの香りとともに、帝政時代のロシアの文化が現代に生き続けていることを我々に伝えている。

了

本稿は2010年日本ロシア文学会研究発表会における口頭発表「調香師エルネスト・ボー『シャネルNo.5』の創造者」と一部重なる内容を含んでいる。

<sup>1</sup> 現代香水とは20世紀以降に生み出された一連の香水を指す。それ以前の近代の香水との明確な画期が存在するわけではなく、年代の区切り方も諸説ある。だが合成香料の使用、製造技術の高度化、現代に受け継がれる香水の系列の誕生、ファッション産業の香水への参入など、香水をめぐる様々な変化が19世紀末から20

- 世紀初頭に生じたことを受けて、これ以降に作られた香水に現代との連続性を見る立場が諸文献で多く見られる。
- <sup>2</sup> ルドニツカ (1995)、15-16 頁。基礎となる香水から生まれた系列の名称については中島 (1995)、350 頁を参照。
- <sup>3</sup> エドワーズ (2005)、40-41 頁を参照。
- <sup>4</sup> Beaux (1946), P. 228-230.
- <sup>5</sup> Beaux (1946), P. 230. より引用。筆者訳。
- <sup>6</sup> Beaux (1946), P. 230. より引用。筆者訳。1920 年という年は帰還の年ではなく、シャネル№5 を制作した年のことであると思われる。
- <sup>7</sup> Kraft, Ledard and Goutell (2007).
- <sup>8</sup> エドワーズ (2005)、42 頁。
- <sup>9</sup> 図の出典は以下。Kraft, Ledard and Goutell (2007), P. 41.
- <sup>10</sup> エドワーズ (2005) の原典は 1998 年刊。
- <sup>11</sup> 中島 (2005)、165-184 頁参照。
- <sup>12</sup> Aldehyde C-111 Len は慣用名。11 の炭素原子を持つ脂肪族アルデヒドの一つ。10-ウンデセナル、ウンデシレンアルデヒドともいう。化学名 10-Undecen-1-al。分子式 C<sub>11</sub>H<sub>20</sub>O。シャネル№5 を構成する重要なアルデヒドである。メタリックなファッティグリーン、重いフローラル様の香気を持つ。また Aldehyde C-110 は同じく 11 の炭素原子を持つ脂肪族アルデヒドの一つ。別名ウンデカナル、ウンデシルアルデヒド、または Aldehyde C-11 ともいう。中島 (2005)、123 頁、および以下のジヴォーダン社のインターネットサイトを参照した。http://ingredients.givaudan.com/givcom/v/index.jsp?vgnextoid=948bad07d427911c
- <sup>13</sup> 中島 (2005)、65 頁を参照
- <sup>14</sup> Kraft, Ledard and Goutell (2007), P. 44. の表参照。この表には、例えばシベット・シンセティックが 0.005% 投与されていることが示されている。
- <sup>15</sup> Beaux (1946), P. 228.
- <sup>16</sup> Шмидт (1997), С. 123.
- <sup>17</sup> Beaux (1946), P. 228.
- <sup>18</sup> 図の出典は以下。Кожаринов (2005), С. 68.
- <sup>19</sup> Руга, Кокорев (2006), С. 81.
- <sup>20</sup> Beaux (1946), P. 228.
- <sup>21</sup> Кожаринов (2005), С. 66.
- <sup>22</sup> Кожаринов (1998), С. 20.
- <sup>23</sup> Кожаринов (2005), С. 23.
- <sup>24</sup> Из книги «Золотой юбилей товарищества Брокар и К°» (1914), С. 325. および Кожаринов (1998), С. 27. を参照。
- <sup>25</sup> Кожаринов (2005), С. 21.
- <sup>26</sup> Кожаринов (2005), С. 52.
- <sup>27</sup> Из книги «Золотой юбилей товарищества Брокар и К°» (1914), С. 326.
- <sup>28</sup> Вольской Т. В. и др. (ред.) (2006), Т. 2. Кн. 5. С. 101 より引用。括弧内は筆者による補足。
- <sup>29</sup> Букетъ Наполеона. 図の出典は以下。Kraft, Ledard and Goutell (2007), P. 37. 香水の翻訳名には括弧を付した。
- <sup>30</sup> Боярский цветочный одеколон. 古きロシアをテーマにした香水の一つ。図の出典は以下。Кожаринов (2005), С. 113.
- <sup>31</sup> Кабакова (2010), С. 53.
- <sup>32</sup> Кабакова (2010), С. 54-55.
- <sup>33</sup> Достоевский (1995)、121-139 頁。
- <sup>34</sup> Внешняя торговля СССР за 1918-1940 гг : Статистический обзор (1960), С. 65.

- <sup>35</sup> ラレとプロカル社の工場についてはラレ社の後身である Свобода 社のホームページに掲載された社史 <http://www.svobodako.ru/default.aspx?s=0&p=270> およびプロカル社の後身である Новая заря 社のホームページに掲載された同社の社史 «Брокар—Новая Заря—Novelle Etoile - три имени одной легенды...» С. 1. <http://www.novzar.ru/?p=16&lang=rus&v=0.258350820746273> および Кожаринов (1998), С. 31. 参照。
- <sup>36</sup> Рассказов (1952), С. 41.
- <sup>37</sup> Эдвардс (2005)、39 頁。
- <sup>38</sup> Beaux (1946), P. 228.
- <sup>39</sup> Beaux (1946), P. 230.
- <sup>40</sup> Веригин (1996), С. 118-119.
- <sup>41</sup> Веригин (1996), С. 176-177.
- <sup>42</sup> Веригин (1996), С. 146.

## 参考文献

## 欧文文献

- Beaux, Ernest (1946) « Souvenir d'un parfumeur » *Industrie de la Parfumerie*. Paris.
- Philip Kraft, Christine Ledard and Philip Goutell (2007) «From Rallet N°1 to Chanel N°5 versus Mademoiselle Chanel N°1» *Perfumer & Flavorist* 32: 10.
- Веригин, Константин Михайлович (1996) Благоуханность : Воспоминания парфюмера. —М.: КЛЕОграф.
- Вольской Т.В. и др. (ред.) (2006) Три века Санкт-Петербурга : Энциклопедия в трех томах. —Спб. Т. 2. Кн. 5.
- Кабакова Г. (2010) Запахи в русской традиционной культуре// Красникова А. (ред.) Ароматы и запахи в культуре. —М.: Новая литературное обозрение. Кн. 2.
- Кожаринов, Вениамин (1998) Русская парфюмерия : X IX -начало XX века. —М.
- Кожаринов, Вениамин (2005) Русская Парфюмерия : Иллюстрированная история—М.: Вся Россия.
- Рассказов, Павел Петрович (1952) Записки заключенного—Архангельск : Архангельское областное государственное издательство.
- Руга В., Кокорев А. (2006) Москва повседневная : Очерки городской жизни начала XX века. —М.
- Шмидт С.О. (Гла. ред.) (1997) Москва : Энциклопедия. Библиотека История Москвы

с древнейших времен до наших дней. /

Составители, М.И. Андреев, В.М. Карев.

—М.: Научное изд-во Большая российская  
энциклопедия.

(1960) Внешняя торговля СССР за 1918-1940

гг : Статистический обзор / Министерство  
внешней торговли СССР. Главное таможенное  
управление. —М.

Из книги «Золотой юбилей товарищества Брокер и  
К°» (1914) // Красникова А. (ред.) Ароматы и  
запахи в культуре. —М.: Новая литературное  
обозрение. Кн. 2.

## 和文文献

マイケル・エドワーズ著、中島基貴訳（2005）『パ  
フュームレジェンド 世界名香物語』フレグ  
ランスジャーナル。

ドストエフスキー著、原卓也訳（1995）『カラマー  
ゾフの兄弟 （中）』新潮文庫。

中島基貴（1995）『香料と調香の基礎知識』産業  
図書。

エドモン・ルドニツカ著、曾田幸雄訳（1995）『香  
りの創造』白水社、文庫クセジュ。



## Шанель №5 и индустрия российского парфюма

### Chanel No.5 and Perfume Industry in Imperial Russia

Оно Токико

Ono Tokiko

#### Краткое изложение

Индустрия российского парфюма получила свое развитие в эпоху императорской России, но она долгое время не изучалась и оставалась неясной. Однако российская парфюмерная промышленность оставила нам великий аромат — «Шанель №5». В данной работе мы изучим историю и культуру российской парфюмерной индустрии, проникнув в историю «Шанель №5», представляющей один из основ современного парфюма.

В первой части мы исследуем происхождение «Шанель №5». Кто же их настоящий создатель? Создателем является не Шанель, которая продюсировала аромат, а парфюмер – выходец из России, создавший их по своему вдохновению, Эрнест Бо. Стало известно, что Бо создал их на основе другой парфюмерной линии «Ралле №1», которая продавалась в то время в дореволюционной России. Прослеживается очень важна зависимость российской парфюмерии и парфюмерии нашего времени.

Во второй части мы исследуем историю и культуру российской парфюмерии. Исследуя её развитие в период с 1840-х до 1900-х годов, изучим объёмы производства парфюмерной продукции в России. А также мы рассмотрим внутренний рынок того времени. Кроме того, мы исследуем культуру российского парфюмерии. Проанализируем виды образов, представляющих каждый парфюмерный товар на рекламных проспектах, упаковках и флаконах. Парфюмерия на рубеже 19-го начала 20-х веков представляет собой не только перемены в русском обонянии, но и особенность запахов, существующих в России с древности.

Однако российская парфюмерная промышленность была прервана революцией. Эрнест Бо уехал во Францию, там выпустил «Шанель №5» и другие ароматы. Как парфюмера, его ждал успех во Франции. Однако он был не только французом, он жил, как русский человек, потерявший свою Родину. «Шанель №5» открывает нам неизведанную историю парфюма.

(2013 年 10 月 30 日受理)